

山梨日日新聞

1月7日
月曜日

発行所 山梨日日新聞社
〒400-8515 甲府市北口2-6-10
電話(055)231-3000
編集 231-3111 FAX 231-3161
事業 231-3133 出版 231-3105
広告 231-3131 販売 231-3132
©山梨日日新聞社2013年

食料支援雇用悪化で急増

年収150万円未満が半数

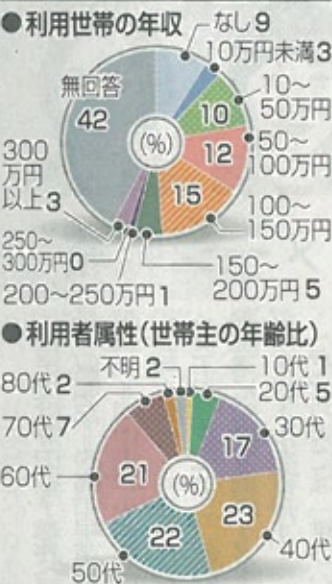
食料支援事業(食のセーフティネット事業)は2010年11月に開始。同法人が、市や社会福祉協議会などから困窮世帯の情報を得て、月に2回、企業や市民から寄付された食料を無料で宅配している。事業は9世帯から始まったが、利用は急増。昨年3月以降100世帯を突破し増

フードバンク山梨利用世帯が最多

NPO法人フードバンク山梨(南アルプス市、米山けい子理事長)が、食料支援する世帯が増えている。生活保護を受けていない困窮世帯に食料を宅配する事業の利用者が本年度、100世帯を超える水準となり、昨年末には過去最多の140世帯となった。同法人のアンケートでは利用世帯のうち、年収150万円未満が半数を占め、無職または非正規雇用で働く世帯が8割。利用増の背景には、安定した収入が得られない厳しい暮らしの実態があるとみられる。

「連載「支え合い 新たな形」11面
(窪田あずみ)

食のセーフティネット調査



える傾向にある。1カ月に必要な食料は2・5トを超えている。同法人は増加の要因を、「関係機関との連携で事業の認知度が上がり、何の支援も受けられずにいた困窮世帯が顕在化してきた」と分析。さらに厳しい雇用情勢が続いている

ことから「利用は今後も増え続ける」とみている。雇用環境の厳しさは、同法人が昨年7~8月に実施したアンケートでも浮き彫りになった。事業を利用中の世帯と過去に利用した世帯、計118世帯からの回答では31%が「無職で求職中」。「パート・アルバイト」(19%)、「日雇いなど不特定の仕事」(6%)と続いた。世帯主の年齢は20~50代が67%を占め、働ける年齢にもかかわらず、安定した職に就けない状況がうかがえる。年収は100万円以上150万円未満が15%で、50

万円以上100万円未満12%、10万円以上50万円未満10%。利用中の世帯(35世帯)は「収入なし」が2割を超えた。アンケートの自由記述では「子どもが2人いるが、食品が何も買えないほど現金がないことがあった」「頼る人がいないので、餓死するか万引するかもしれない」などの声もあった。米山理事長は「アンケートは想像以上に厳しい結果。命をつなぐ食べ物を提供するとともに、就労できるように支援していくことが必要だ」としている。

飽食の時代と言われながら、明日の食べ物に事欠く人々がいる。公的支援制度からこぼれ落ち、貧困に陥る「見え

支え合い 新たな形

フードバンク山梨の試みから

〈1〉

「ない貧困層」が拡大する中、新たな支援の仕組みを根付かせようという先駆的な試みが、山梨で続けられている。企業や市民から寄付された食料を無償で提供するNPO法人フードバンク山梨(南アルプス市)。目指すのは誰もが食を分かち合い、支え合う社会。活動を追った。

〈窪田あずみ〉

食料支援が命綱に…

南アルプス市内に住む職場トメさん(77)は、長男の久雄さん(54)と2人暮らし。フードバンク山梨の食料支援を受けて3カ月がたった。

ぎりぎりの生活

15年ほど前、久雄さんが20年以上勤めた会社が倒産。再就職先も約4年前に倒産した。市役所やハローワークなどに足を運び、職を探し続けているが、50歳を過ぎた今、正社員の仕事は見つからない。アルバイトで食いつないできたが、昨年からそれは見え見づらくな

くなり、収入はトメさんの月6万円の年金だけに。家賃の滞納が続くぎりぎりの生活。光熱費を切り詰めるため、暖房はほとんど使わず、セーターや靴下を何枚も重ねて我慢する。

そんな生活の中で、市の福祉担当者から紹介されたフードバンク山梨の食料支援。「いただけるから何とか食べられる。ありがたくて、ありがたくて」。トメさんはフードバンク山梨の事務所を探し、お礼を言いに行ったこともある。

ただ、支援を受けることに心苦しさを感じる。社会の支援は、幼い子どもを抱え、苦しい生活を送る家庭に回してほしいと思う。「でも、どうすることもできなくて」。久雄さんの

事故で歯車狂う

「何のために生きてるのか」。足腰が立たなくなったら、首でもつって死ぬのが一番幸せなんじゃないか」

敏夫さん(70)は仮名、甲府市に頭を抱え、うつむいた。4年ほど前に心臓病を患い、最近では自分の言動に認知症の不安も感じている。

月4万円の年金。それが唯一の収入だ。周りに頼れる人はいない。「1人だから我慢すればいい」。金がなく、食欲もわかずに、2、3日何も食べないこともある。水だけ飲んでいれば結構生きられる。そんなことに気付いた。

敏夫さんは市内の高校を卒業後、都内の企業に入社。その後甲府の実家に戻り再就職したが、24歳の時にバイク事故を起こし、左目を失明。仕事を失った。片目が見えないことが響き、正社員の仕事に就けず、職を転々としてきた。酒におぼれた時期もあった。

事故で歯車が狂った。つまらない人生を歩いてしまった、と後悔している。「でも、身から出たさび。ちゃんと働いてこなかったから、しょうがない」。今の厳しい暮らしも納得している。

昨秋、週に何回か通う福祉センターで出会った人に誘われ、市内でNPO法人が開いている炊きだしに向いた。そこで法人スタッフからフードバンク山梨を紹介され、食料支援を申請した。

「この冬は安心して暮らせます。誠に申し訳ありませんが、今後ともよろしく願います」

フードバンク

生活困窮者に「食品」無料提供

援などに提供してきた。



フードバンク山梨のスタッフに生活の相談をする職場トメさん。あたってはこたつが唯一使っている暖房器具。フードバンク山梨から譲り受けた

久雄さんにとっても生活保護は望む暮らしではない。「当然、仕事がある

食のセーフティネット



「フードバンク」とは、賞味期限内でまだ食べられるにもかかわらず、廃棄されてしまう食品を企業や農家から寄付してもらい、福祉施設や生活困窮者などに無償で提供する活動。米国では40年以上の歴史があるが、日本では、フードバンク活動を行う市民団体が設立され始めたのが2000年以降とまだ日が浅い。NPO法人フードバンク山梨は08年10月に発足。企業や農家から、箱の破損などで販売できない賞味期限内の食品、規格外の農作物を寄付してもらい、福祉施設や生活困窮者への炊き出し、市町村への緊急食料支

5(282) 8798。